

---

# Project Product ~偽りの世界と未知の病~

#3-Baraotome

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Project Product偽りの世界と未知の病

### 【Zコード】

N4535M

### 【作者名】

#3-Baraotome

### 【あらすじ】

ふと気が付くと

そこは別の世界だった

幻覚に蝕まれながらも、必死で抵抗する主人公。

こんなことが起きたのは

あの研究プロジェクトからだった！！

主人公視点で伏線を回収しまくる

主人公体感型小説です（謎）

## 1章 - 01闇の中 (前書き)

国語力がほぼあつません。

はじめまして (汗)

誤字、脱字、空間がひろい、棒が多いなどなじみ所満載ですがこの分かりにくい世界をいろいろと解説して下さると有り難いです ( ^ - ^ ;

それではじみや~

走っている

走っている

そういえばいつから走っていたのだろうか

暗闇の中考える。

真下に伸びる永遠とも言えるこの長い白いラインの上を私は逃げる  
ように走っている。

あの頃から私は変だ

あの研究を始めた頃から……

だめだ……しつかりするんだ  
そうしなければまた

またおかしくなるか分かったもんじゃない

時刻を確認しようと左手の腕時計見る。

止まっている

そう……秒針も長針も短針も全て止まっていた

やつぱり時間が……

ハア　ハア　ハア……

よしやく……だ

さつきから走っていたのは、線路沿いの道路から駅へたどり着き、時刻を確認するため

それに、時間が止まっているのかこの時計が壊れているのか確かめたかった。

それだけだった。

今の時代には珍しいアナログ式時計だ。

短針は10、長針は4…らしき所を指している。

今針が動いたことを考へるとどうやら壊れてはいないうちにかがおかしい。

もう少し近づく

つつ…！

おかしいのは当たり前だ、すべての文字が左右反対になつてゐる、しかも1番上には”1”という文字がある。

今まで必死だつたから気付かなかつたが、周りの看板などの文字、文字多分逆なのだろう、直ぐには読めるものではなかつた。

13時？

一体なんだこれは…

この暗闇の中、一人取り残された感覚が襲つてきた。

ぐつ

同時に頭痛。

「そう。此処は偽りの世界」

そう、聞こえた。  
女の声だった。

## 1章 - 01闇の中での（後書き）

すいません（^-^;）  
分かりにくいですね～でもこのくらいの方が  
主人公体型小説（謎）  
には丁度いいかと…次回作に期待ですねっ！！  
それでは～

## 1章 - 02アカネ（前書き）

そういうえば忘れていました。

1話でお分かりでしょうが、主人公の台詞には「」が付いておりません。主人公体型とことで主人公視点で色々やつちやいます。見にくいでしようが、力尽きるまで粘りたいと思つております。

それではどうぞ～（^ - ^；

## 1章 - 02アカネ

だれだつ

辺りを見渡すも誰もいない。

すると、時計塔の影から少女が現れるのが見えた。

「ここにいれば誰か来ると思って」

少女は言った。

「こんばんは…かしら。私はアカネ。ここで私以外初めて人を見たわ」

…私は、

といいかけて、自分の名前が思い出せない事に気付く。深く考えても頭痛が酷くなるだけだ。

「どうしたの？」

アカネと言う少女が心配そうにしている。

いや大丈夫、思い出せないだけだ。自覚のある記憶喪失なんて珍しいのだがな。

取りあえず聞きたい事があるのだが、いいかな？

「ええ、私でよければ」

ではまず、あの時計はなんだか判るかい？

頭上にある摩訶不思議な時計を指す。

「一番上の”1”とか左右反対とかは置いといて、時間はちゃんと

と正しい方へ進んでいるみたい。

そうか……

「待つて、立ち話もなんだから座れる場所に行きましょ」

アカネが指差す方向には待合室らしき場所があつた。

ふう、

だいぶ頭痛もおさまってきた。

では、アカネ…さん？」の世界について何か知っていることはないかい？

「んー、私にもよく分からぬ。文字とかが左右反対になつてゐる」とぐらこしか。私もここにはそんなに長くいなーの」

そうか：まあ情報が無いのは分かつた。

すまなかつた。今日はもう遅いし、明日また聞くとするよ

そういうつて、私とアカネは待合室で夜を明かした。

## 1章 - 03ナ-カ（前書き）

888文字（空白句読点含む）でお送りします、第3話ー！  
ついに来ます……！

謎の主人公による、厨二病的展開の為の、主人公体感型小説（謎）  
が始まります～（^ - ^ ;

朝

ちゃんと日は昇っている。  
向かいの席に目をやる。

アカネはまだスヤスヤと寝息を立てている。

時間を確認しようと時計塔へ。

時刻は、6時20分といったところか。

読みづらさには慣れ。しかしながら文字板の頂上には謎の”13”という文字が。

取りあえず他に人がいないか探さなければ。なんせ情報が少な過ぎる。

この状況で彼女と離れるのは気が引けるので、できるだけ近場を探そうと駅の外へ

これは……新白ヶ丘市！？

昨日は暗くて分かりづらかったが、ここは新白ヶ丘市そのものだ。  
看板の文字やなんやらが反転しているのを除いて。

細切れになつた記憶でも判る。ここは私が通い、勤めていた学園都市なのだから。

んん？？

ふと、黒い何かが視界の端を掠める。

するとそれを待つていたかのように、

何かが、何かが来る つ  
△ゲ  
ル

二  
夕

二

まだ、また幻聴が、耳の中が、頭の中がうるさい騒がしい。周りの景色は、呆れるほどこんなに静なのに……

元  
ア  
シ  
ケ  
ル  
：  
ま  
だ  
、  
続  
く

二  
タ  
ト

- 1 -

止まつていた。  
止まつた、のか？

杖：か  
？  
氣配を感じ後ろを振り返る。アカネの姿がある。何か持っている。

「しつかりして！！ 今、魔法をかけたから」

ああ

我ながら情けない。前ならいのぐらこの事、たいしたじとなじはずなんだが

そう。  
言いかけて気付く。さりとまで忘れていたことが思い出せる

「ん？」

アカネが深刻な顔で首を傾げている。

そう、私の名前…は ミナト。ミナトと呼んでくれ。今、思い出した。それともう大丈夫だ、ありがとう…助かったよ。君は、魔法が使えるんだね？

「え、ええ。 それにしても、本当に大丈夫なの？」

ああ、大丈夫…だといいがな

私は彼女にさつきのことを説明するため、もう一度待合室に戻ることにした。

「本当に大丈夫なの？ 汗とかすごいけど」と言つて何かを差し出してくれる。

水が入つたペットボトルだ。ラベルの文字は逆だが。

すまない・・・少し説明させてくれないか？

「あなたがよければ・・・私も聞きたかったんだけど、無理はしないでね？」

意外と心配性のようだ。今度からは余り無理をしない方がいいだろう。

落ち着いて聞いてくれるか？

さつきのような幻覚は前にもあつたんだ。詳しくはあまり思い出せないんだが、この世界へ来てからも何回かあつてな・・・でも、今回のは少し違う・・・気がするんだ。何かが話しかけてくるようなそんな感じがする。

「それって、ミナトの頭上に漂つっていた黒い・・・雲（？）のような物とかと関係ある？」

アカネが尋ねてくる。・・・近い。

幻覚を見る直前に、私も黒い”モノ”を見た。だから恐いのは、そいつが原因ではないかな・・・

それにも魔法が使えるんだな。それはとても頼もしい。でもアカネはどこでそれを？

「自分で言つのもなんだけど、私つて適応力には自信があるの。なんか 身体にスッと染み込む感じで。」

「だから魔法なんかも得意なんだ。新しい魔法とか自分でたまに思い付くしね。さつきのはただ単に力をぶつけただけなんだけど」

それでも容量の制限があるんだから、多用は控えたほうがいい  
「…仕方ない。そうするわ」

そう言つてやつと待合室の古びた長椅子に腰掛ける。  
やつと落ち着いて彼女…アカネを見ることができた。私よりだいぶ  
若い。学生でなのはないだろうか。…………そんなことよりも、他に  
人がいないが探さなくては。こここの情報が欲しい。

アカネさん、私は大丈夫です。それより他に人がいないか探しませんか？

そう言つて私は席を立つ。

「ええ、いいわ。ミナトがよければ。」

アカネも賛成らしく、私と同じように立つていた。

…取りあえず線路沿いを進むことになった。私が走つてきた道だ。  
暗かった為に何も情報は無い。

戾つて何か分かるかもしけないとのことだが、正直言つて恐ろしい。  
未踏の処女地に足を踏み入れるのは、相当の勇気がいるのだから。

駅から少し歩いたところで、手分け・・・アカネと適度な距離を保ちながら、周辺区域を人がいないか探している。ついでだから、さつき取り戻したらしい曖昧な記憶を整理してみる。

私が思い出した記憶は

- 「研究室にいたこと」
- 「自分はミナートと名乗っていたこと」
- 「魔法の研究をしていたこと」

の3つ

とは言つても最近の記憶のほうが思い出せないから基本的なことは分かる。

たがしかし、どうしてこの世界にいるのか分からぬ。  
誰が? なんのために? どうしてこんなところに?

答えられないのは分かつてゐる、聞けないのも分かつてゐる。

アカネにぶつけたつて意味はない。彼女はミカタだ

ミカタ ?

それじゃあ敵がいるのか

アカネは本当にミカタなのか

悪魔が囁いているようだ……頭がガンガンする。

アカネは味方だ。これはきっと、いや必ず大丈夫だ。こんなところ  
てじつとしても仕方が無いのは分かつてゐる。もつと仲間がいる。  
元の世界へ戻るためにも。

そう考へてゐると、黒い影が

またか……つ

れつきのが来ると思い、とつさに身構える。アカネが見当たらない。

黒い影が 消える。

……すると自分の眼前に剣が突き立てられていた。

「貴様」

黒い影 もとい人影は話していく。

「貴様、何だ……人か？」

その前に、剣をどかしてくれ

「ああ。 それよりも貴様、なぜここにいる」

そう言つて正体を明かす。私と同じ年ぐらいの若い青年だ。ただ  
服装は戦場にいたかのようにボロボロになつてゐる黒いローブのよ  
うなもを頭から被つていた。

私は聞かれたことが全く分からなかつた。

「どうゆうひことなんだ？」

取りあえず聞いてみる。

「覚えていないのか！？あれほどせんせん」必死に話してくる。  
しかしながら記憶がない私には何も分からぬ。

しばらく聞いていると、ふと話しが止まる。

「仕方ない。貴様の記憶が戻るまで仲間になつてやる。異論は許さ  
ん」

待つてくれ、もうひとり仲間がいるんだ。全員揃つたところで話を  
しよう

「仕方ない。……それでどこにいるんだ？」

「これが、2人目となる”人”との出会いだつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4535m/>

---

Project Product～偽りの世界と未知の病～

2010年10月11日00時37分発行